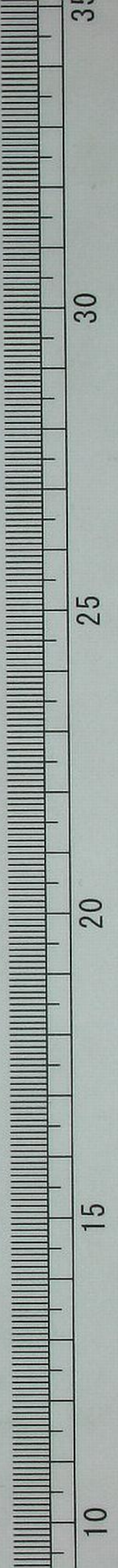




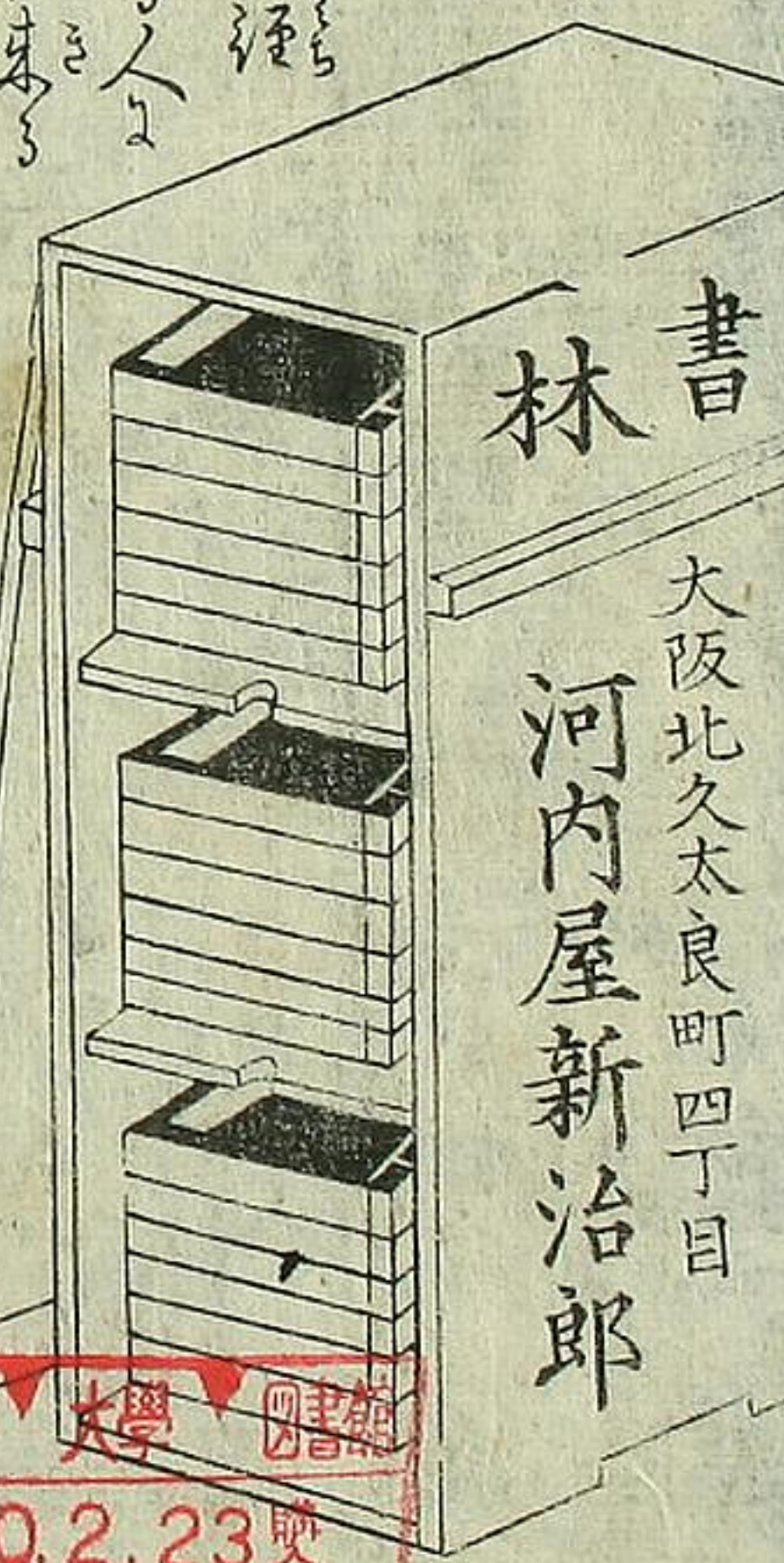
古文俗讀
二

= 5
2364
2



門二五
號 2364
卷 2

大江玄圃先生著
間合早學問
前後四冊



書林

大阪北久太良町四丁目
河内屋新治郎

早稲田大學圖書部
昭30.2.23
藏書

此書は初學徳入の捷徑
附合てもよく合のむ
中々小のりて... 唐古代... 諸學に由來諸家... 或唐土の紙... 漢中書家... 什抄中... 一... 學者... 記



談卷之二

目錄

- 火齊珠方諸之事
- 七十二候之事
- 天河之事
- 曜星之事

天文谷

目錄

天文俗談卷之二

火齊珠方諸之事

水晶乃眼鏡（まなこ）と云ふ川（がは）に日輪（かぢし）の火が燃ゆ事一人のく
 ちの事と云ふ火と云ふ人の子がやき事と月と水をぬてみ
 るといふ人の子がやき事と太陽（たいよう）とちがひ太陽（たいよう）の火をぬてみ
 かければ火が燃ゆ事と云ふてぬり火珠（ひたま）一小火齊
 珠（たま）と云ふ又玫瑰（まぐい）と云ふ唐書（たうしよ）小東南海中（せうとうなんかいちゆう）の火をぬ
 る事と云ふ又占城國（せんていこく）の火と云ふ水精（すいせう）の事

こく卵の状にして色白教尺の面を照すまゝ、陽燧
て銅を鑄く其形面を凹めてせむは揉摩し熱
せ日よ向て艾を火とらむとこねるものあり
方諸を月乃水にれまを大梓つりといなりまゝ白石
つりて皆氷ぬり銅と錫とをまか合せてまきを
撈て鑑がく磨て懸る月を照つるこく
むく水とらぬ盤ふくく教滴と下す水精
く艾とく火をこらるがく乃まぐい

水晶の珠を水に火ともふまきぬこくふり
り方諸一名は陰燧といふ

七十二候之事

或るいふ、世に出るところの懐中曆小十二候
あるといへども俗人乃目にまねね事なり國字
曆よまなり外に曆よありて曆なりや答曰俗人の
ぬ曆のはを何れに具注曆といふものありあり
ま字より書たるものありま字曆ともいふ板板ふか

一 此のころより七十二候を分るなり 天地乃氣候の人物
に之のりや五日くは糸を變るなりして五日と一候と
一 三百六十日のみらと一年とをまきを七十二候とし
まきとしやちふ月の節よそりの日より凡十五日許あき
と一氣のりよ一氣のころに三候なりとまき日ごとく東
凡解凍乃一候なり冬の内一寒氣あしく凍り
まの氣よめて東風也凍が解凍なりなり東方ハ木
属一四時小配してハ木小なりハ陽氣をこし氷

がこいそりなりやの深才二の候 黃鶯現眺とくうらひ
と心一海よりかく声なりとく小さく初下りなり
乃候 莫上氷と極寒の時を莫水乃下に伏し藏るは
一 此陽氣の溫暖と得て水乃と小游なり 雨水ハ正月の
中氣寒ト凍るれ者數にけそ雨も水とかり意なり
此日すはに才一候 土脈潤起なり 極寒に凍りたる
キ氣陽氣よ潤し土脈乃和氣通ト起りなり才二
候 霞始凝とく陽氣の色なりをきて此れ初なり霞

色花らしに又中より小物り才二候草木萌動と
は丁終よりありてハ天地乃氣泰下ハ一交り陽氣に光
く由きて惣しての草木も才五て萌動り啓蟄
ハ二月節なり極寒の時伏藏したる諸虫戸を啓出り
かり故に丁に其日才一候蟄虫啓戸といふ也
うらやめゆく虫中を物りり才二の候小桃始咲
を挑乃花とて先て奴とて先火とてはるり惣
して諸花とも花の咲と咲といふ一雀護が詩小桃

依舊暖春風といふ句あり詩哥にもに笑といふも
し答の才一初まきしはさるとはかり才二候菜虫化
蝶とせ人乃乃る色菜乃虫のさびし終ふありて蝶
こ化すなり春分と二月乃中気終の日とに才一候
雀始巢とて雀巢とてハ丁終よりハるり春
分と陰陽の交會するに日出日入昼夜五十刻ハ
て正等なり等分の候とてハるり節氣の大なり
このりり才二候櫻始開とてハるり桜系とてハるり

候乃の形り也之候霜止出苗もいし海八十八
 夜すきて天氣温暖くも霧ゆく苗代々後く
 も葉こ出りあり立夏ハ四月の節氣かり此日迄
 氣終て支の氣を何ち梨也の日とくゆ一候
 鼈始鳴乃候かり鼈も即蛙の字ハ曆百小鼈
 とゆきこも心字ハ鼈あり田野乃蛙かきりしるこ
 才二候蚯蚓出る此ハあり蚯蚓地と小虫と
 先りぬり竹の子生る世と甘竹の子生る此ハ

小満ハ四月乃中此ハ新物成秀生ず小ハ盈満の心
 して小満ハ小ハ日蠶起食桑の候なり蠶生三月と
 此ハ桑乃葉成食小かり紅花榮もいし海紅花のさ
 ころをいしあり麥秋至も也の以麦秋小かりなり芒
 種ハ五月ハ苗氣は月芒の末穀を種包一故小の之
 其日蟠婦生乃候ハ梨蟠婦を風と吹落成食小一陸
 乃氣ハ感トて生ず腐州為螢の候冬雨湿陽氣の業
 蒸ハ此ハ下海腐成草化して虫とかりなり梅始黄

梅の葉色付けり夏至も五月乃中氣あり一陰
泉の下に動盛陽志位旅友なりよその日すから乃
東枯乃候那子乃東も友枯系ありうらぬもさ
枯不事ともよふし枯枯くむる言蒲華ハ此ら
死にたしむるなり半夏生もす友生ずるありかすのひ
あふくともおれも事ともよふ葉草あり友の幸にえり
也へ半夏とよふ小暑も六月乃節氣極熱ハ大暑に對
してかくしむの候温風至ら盛熱の時風はくはかり

蓮始華也蓮乃吐候くしむる鷹乃學習也此は秋
乃雜多飛くは教習學あり大暑も六月中氣極熱の内
故く大暑とよふ也乃候桐始結花ハ土用中に本幸に
花と葉の面よ結なりは桐も白相あり土潤溽暑く
陽氣土湿と蒸潤して溽暑なり大雨時行ハ白雨時々の
とよふ也秋も七月の節秋小氣あり也の候涼風至くと
秋を告げてしむる風は涼風ハ秋風あり寒
鳴も蛸も乃しあり鳴くはひかり寒蟬ハ蛸も葉

霧升降（霧の上下）とびとる霧のきらなり又と降するも
 蒙（曇）と霧（霧）ハ蒙（曇）と迷（迷）とのわりの愈暑（暑）ハ七月の中
 此（此）より残暑（暑）ありとや時不退（退）かり故也愈暑（暑）ハ七月の中
 相用（相用）ハ六月の比より綿（綿）乃相用（相用）して綿（綿）乃少（少）きりしりかり天
 地始（始）貴（貴）と天氣漸（漸）を升（升）地氣漸（漸）を降（降）す蕭然（蕭然）と
 物（物）乃（乃）更（更）り至物（至物）乃寧（寧）新（新）と登（登）るなり未乃登（登）る
 此（此）よりあつて熟（熟）するなり早稲（早稲）やりのわするなり
 望八月乃節（節）氣（氣）秋氣（秋氣）増（増）て霧草（霧草）白（白）

此（此）候（候）草露（草露）白（白）と上（上）小（小）のさまり方ニ候（候）鶴（鶴）鳴（鳴）
 鳴（鳴）と（と）雛（雛）渠（渠）六（六）乃（乃）了（了）海（海）より玄鳥（玄鳥）去（去）と燕（燕）入り
 此（此）の秋分ハ八月の中（中）氣（氣）陰陽（陰陽）交代（交代）昼夜（昼夜）等（等）分（分）春分（春分）の如（如）
 一（一）その候（候）雷（雷）乃（乃）収（収）声（声）と此（此）より海（海）より雷（雷）が（が）鳴（鳴）るなり
 蟄（蟄）貴（貴）杯（杯）戸（戸）とら海（海）より陸（陸）奇（奇）蟄（蟄）恐（恐）て土中（土中）に伏（伏）
 一（一）蟄（蟄）るなり各（各）ちとめて穴（穴）の口（口）とら戸（戸）を閉（閉）たるが
 此（此）より水（水）始（始）涸（涸）と此（此）より陰（陰）氣（氣）と此（此）より水（水）氣（氣）
 酒（酒）と此（此）より寒露（寒露）ハ九月乃節（節）氣（氣）陰（陰）氣（氣）増（増）長（長）して

お初はつとすするる時ときなりなりその候うら鴻雁こうえん来き雁げん北きた地ぢよりより来き
所謂いそや初はつ乃なり菊きく花はな開ひらく菊きくののささ花はなををひひらひらけけ
蟋蟀せつせつ在あ戸と中ちゆうに入いりり今いまニニトトハハナナリリ
霜降しもふり九月くわがつ乃なり中ちゆう氣き止どぬぬりり霜しも少すくなりなりその候うら
始降はつふり上うへののささ小こ北きたかかどど要えん時とき施せととハハナナリリ
ふりふり楓ふう蔦つた黄わうハハ楓ふうととハハ蔦つたのの葉はもももも黄わう葉はととすす
立冬りつとう十月じゅうがつ乃なり節せつ氣き止どぬぬ日ひ冬ふゆキき山さん茶ちや始はつ開ひらくとと
この花はなもも下しもりりとと咲さけけ地ぢ始はつ凍ことと寒さむ氣き止どぬぬりり

地ぢ氷こりり金きん盞せん香かうとと今いま金きん錢せん花はなののふふ名な一いつ
初はつ小雪せうせつハハ十月じゅうがつの中ちゆう氣き止どぬぬりり降ふりりその候うら虹こう
藏くら不ふ見みハハ陰いん陽やう乃なり氣き止どぬぬりり陰いん氣き止どぬぬりり故ゆ小こ虹こうのの
氣き伏ふしてしてききととなりなり朔しやく風ふう拂ふ葉はハハ木このの葉はととハハ風ふう
少すくきてきて木このの葉はちちりりととつつりり朔しやく風ふうハハ北きた風ふう乃なり橘たちばな始はつ黄わう
とと抽ひ蜜みつ柑かん乃なり色いろ付つ葉は不ふなりなり乃なり大雪たいせつハハ十一月じゅういちがつ乃なり
節せつ止どぬぬりり為な者もの大たい小せう乃なり今いま乃なりのの候うら小こ閉へい塞さい成せい冬ふゆととハハ
いいははししとと人ひともも戸と窓まどはは閉へいととりり此こゝ也なりももちち不ふ入いてて戸とをを探たずめめ

一陰氣を小陽氣蟄伏一萬物を閉塞し熊蟄穴
 もいへり雉穴に入て陰氣を避く物ざるは
 鯪魚群
 ち妾與むるりらるり冬至は十月中氣一陽氣復
 乃こた日輪南至の極冬のいつ天の一歳乃こりめ
 乃東生ハ夏枯草ハ首くゆり麋角解く麋乃
 角於ちこるりりるり若下出来ハ麦生じて雪の下に
 出た那も小寒は十二月節寒氣河を々の内ハ大寒
 小對して小芥乃榮く芥こもるり水泉動

一陽地中に生じて水泉の氣脈動り雉始雛ハ雉
 乃雄との雌を求てつめり大寒ハ十二月の中氣大寒
 氣はふさふさしこの候款冬華も落のふさふさ水
 澤腹堅く氷もたゆる内ハ水澤の水面のこりい
 寒威強上下ハ徹て皆凝り腹堅く小鶏始乳も
 出たあやう鶏もた出て巢小入る卵もつるり

天河之事

或問天河のいふと力の友もくみ西もこ冬ハ足ん
 たり

行あり行ありの善書曰天行も銀河或ハ天漢雲漢
行漢かきい流く名目多し一ハ地との水氣乃
精舟も天行もなり故ハ天行の名有り左傳河
圖括地象 天官各靈憲注 晋書天原發微 天文志 物理論埤
雅 管窺揖要等の書その外づきのりも多しふたが、然
れども近世西域乃天学よりて抄入説ハ望遠鏡にて
去ま誠字わくを寧ろ去ま微塵の小星隠るるなるを
梨地乃おと聚り一ハ此白煉翁乃やうにも漢志の

て南の列嶺表よりあまふても極月一列煉をい
乃短きり夜ハ望遠鏡にて観て朗然と微
塵の小星をみるなりハ漢土乃いやへりその微塵を
小星なるはあはれりて移くに虫像の見えしなり
至國ハ河精舟もて天行もなり流渚説いりくわのこ
又復して冬にえし如るハ天の運行乃かすやと暗氣の
為小かくさるるなる天河帯れあはれ白煉乃あはれ尾
宿共宿のなりより起りて二列よりハ河鼓星の

俗小星章
牛星形

わろふて心より廿六星宿張宿のつくり
にて波一六く其長天を竟るなり然るふ日の長短は
しら日乃天小形の章一日も同くす日に星の毎日の
よりにりて夜くわくころ星次第くはらひまこ
冬くハ大よらふなりたよハ参星十一月中冬を至の次
を天の中へまこころ夜半ありせれより十二月首に
小寒大寒乃時ハふま夜半よりハ次才小西へくハ次ま
より終く西小よりく二月春分乃丁海ハ黄昏に南

中して夜半ハ西へ入てまえず如井のとの九星至五月
中れ丁海ハ参星ハ日よりやより夜半あり其星南中より
かり冬半ハ表表乃や小形くまき九月丁海より
天行黄昏にハ西ハがまこころなり十一月
十二月ハ終く登乃より廿六く地下に入る黄昏ハ
より終くよりかり其ハ大く黄昏ハありまこころ見や
より一月丁海より終くより廿六く七月
乃丁海ハ表表乃よりそのと友ハ天行表よりより

天文記 暗太陽南小者く自然く諸曜の光下り
し此の理がうをうけくまへえ冬ハるるを
いふなり

九曜星之事

九曜星くわうせいすこも十二曜がくわいせとにけり各々
星體ありや何答曰其事但徠の譯文筌蹄も
ゆゑ九曜星十一曜星と云星多ゆ一曜の字ハ日表
光も照も熒もよし字あり日月小水

土金水の事 こと人多し七曜といふ抄ハ羅暎星
計都星の二星とてく九曜星と名有九曜 小月字星紫
気星の二星とてく十一曜といふ其羅暎計都紫
氣月字の四つを暗曜といふ右のつら其體もあき
その暗曜の事ゆへ曆学と向ふをさるるに
羅暎計都の二星ハ其言家小傳ら大切用あり
ゆへ

天文俗談卷之二終

